

令和6年度 実践報告会

早稲田大学インクルーシブ教育学会では、インクルーシブ教育の実践を報告する場として「実践研究報告会」を毎年行っています。今年度も本学会の各部会から、現場で実践に取り組まれた方々に報告をいただきました。

講評/ファシリテーター： 本田恵子先生 ・ 高橋あつ子先生

生徒支援における諸問題について ～聴覚に障害のある生徒の受け入れの事例から～

公立高等学校教諭 毛利 徹生氏

聴覚に障害のある生徒を公立高等学校(普通科)で受け入れるために行った実践についてご発表いただきました。受け入れ準備（関係機関との連携や環境的整備）、校内職員の意識改革、対象生徒の心の理解など支援ための様々な工夫、また、その過程で生じる葛藤(例えば合理的配慮のあり方等)を専門家と連携し解決してきたことを教えていただきました。



さらに、生徒の外側部分だけを整えるのではなく、生徒自身の力をより伸ばすために、苦手な部分について一緒に向き合い解決したり実践を用いて将来を見据えた支援を行った点についてお話いただきました。

英語の学習方略指導による効果の検討 ～認知特性に応じた指導を通して～

早稲田大学大学院教育学研究科 福重 蒼唯氏

中学入学後、英語及び数学に躓きが見られる生徒13名にKABC-IIを実施し、その結果を基に認知特性に応じた英語の学習支援を行った実践についてご発表いただきました。具体的な支援内容としては、支援時間の流れを構造化したり、KABC-IIで明らかになった認知特性に合わせたプリントを用意したり、また生徒自身がMI (Multiple Intelligence) の質問結果を把握し、自身にあった学習方法を選択できるようにしていました。

その結果、介入前と介入後のテストの平均得点に統計的な差があることが明らかになりました。また、この差は3学期に取得したテスト得点でも見られたことをご報告いただきました。



体験学習の意義の検証 ～アドベンチャー教育の実践を通して～

まなび創造アカデミー 鎌田 学氏

体験学習サイクルの理論を基に、企業研修において体験を通して「学び」と「変容」を促進させるため、アドベンチャー教育プログラムを行った実践をご発表いただきました。

アドベンチャー教育プログラムの介入前後の質問紙の結果から、モチベーションや承認などの平均得点に統計的な差があることが明らかになりました。また、仕事へのモチベーションには、仕事への貢献意欲が大きく寄与していることが分析によってわかったことなどをご報告いただきました。全分析を通してアドベンチャー教育はすべての参加者に有効であることについてお話いただきました。



～参加者の声～ 一部抜粋

- ・「合理的配慮は権利であって、その配慮を使うか使わないかは本人が決める」ということは、理解することができたが、現場はそう考えていない人も多く、様々なご苦勞があったことと推察した。本人が学びたいと思う場所で、本人が学び方を選択できるように、場所や環境を整えていきたいと改めて感じた。
- ・K-ABCⅡで認知尺度よりも習得尺度の方が高く、書き尺度が低い、という事例に出会ったことはなかったが、効果的な支援方法については認知尺度よりも習得尺度の方が低い児童生徒等にもあてはまるのではと感じた。生徒の得意なところを使った活動や認知特性に応じた課題、手順の細分化等、通常の学級でも取り入れられる要素があると思った。
- ・20年ほど前にアドベンチャープロジェクトを体験し、チームビルディングに役立つことや、自分の存在意義（組織的な役割）を再確認できるといった点において、よい取り組みであるという印象があった。企業でも取り入れられていることを今回初めて知り、他者の影響を意識的にも無意識的にも受けることや、継続的なフィードバックと内省の重要性など、個人の成長や組織のパフォーマンス向上に寄与することがわかった。



次回の研修は、

『発達障害の子の思春期を支える大人の関わり』

【講師】 田中 康雄 氏（こころとそだちのクリニック むすびめ）

【日時】 2024年11月17日（日）9:00～12:00

【場所】 オンライン研修 ZOOM のみ

【申込】 右の QR コードよりお申し込みください →

